

特別寄稿

トランプ当選後のアメリカ

——アメリカの何かが死んだ日



＜著者プロフィール＞

渡邊 裕子 わたなべ ゆうこ

ユーラシア・グループ、日本顧客担当部門ディレクター。2006年にハーバード大学ケネディスクール大学院修士課程を修了後、ユーラシア・グループ（Web: www.eurasiagroup.net）に入社。ユーラシア・グループは、1998年に国際政治学者のイアン・ブレマーが28歳で設立した地政学的リスク分析を専門とするコンサルティング会社で、この分野のきかけとして知られる。政治的変動がビジネス環境に与える影響について分析し、顧客に対しアドバイスやコンサルティングを行う。同社は、米国及び欧州の200社を超える顧客に加え、日本の大手企業顧客およそ50社を抱える。経済界のみならず、政界、官界のリーダーたちにもアドバイスをを行っている。



選挙の翌朝、シーンとした地下鉄の車両の中で泣いている若い女性がいた。隣に腰掛けた男性（知り合いではない）は、彼女に、何の前置きもなく、「Don't be scared. He can't do anything」と声をかけた。この週末、ユニオン・スクエアの青空市場でも、お客である白人男性と売り子のヒスパニック系女性の間で全く同じやりとりを目にした。

ニューヨークの我々は、「バブル」の中にいるのかもしれないが、それでも、何の説明もせずとも、今自分と同じように感じている人たちが周りにいっぱいいる、と感じられるのは少しだけ慰められることだ。これがもしオハイオやミシガンやテキサスなどにいたら、そうはいかない。周囲の過半数がトランプを支持したのだから、精神的にはるかにしんどいだろう。

この、朝起きる気もなくなるような、胃がムカムカするような気持ち悪さ、裏切られ、傷つけられたという敗北感、世界が一夜にして自分が今まで知っていたのとは違う世界になってしまったようなシュールな気分（「不思議の国のアリス」のような）、これから何が起きるか考えると恐怖でぞっとする気持ち、世界が確実にしかも劇的に悪い方向に向かっているという手応えは、以前にもどこかで経験したものだ、デジャブのような、あれはいつだったっけ……と考えていたら、2001年9月11日のテロだと気づいた。あの時感じたのと同じ気分を、今、毎日感じている。

ある意味、今回のことは、（まっとうな民主主義の手続きを経ているとはいえない）一種のテロのようなものだったかもしれない。前回のテロとの最大の違いは、今回は、外部の敵ではなく内部からの攻撃であったこと、アメリカ人が自らアメリカという国、そしてそれが体現する理念に仕掛けた前代未聞の破壊行為であったということだ。その分、いっそう救われない気持ちになる。

医師である私の友人は、「誰かが死んだような気分」と言っていた。確かに選挙

翌日の私のオフィスは、1日中お葬式のようなだった。ケネディ大統領やキング牧師やジョン・レノンが殺されたとき、多くの人はこんな気分だったのではないだろうか。実際、11月9日を境にアメリカを象徴する何かが死んだのだ。

普通、ジムやヨガの先生というのは、政治的なことを生徒に向かって語らない。さっとジムやヨガスタジオから、「政治や宗教については、自分の意見をクラスで述べないように」と指導されているのだろう。でも、今週は、行ったクラスの全てで、全ての先生が、「トランプ」という言葉こそ口にできなかったが、明らかにこの選挙を受けて感じている思いをおおびらに口にしていた。

ジムのスパルタなクラスの先生は、「There is a lot to do. We have to be stronger. I need you.」と怒鳴っていた。それは要するに「これから我々は戦わなくては行けないのだから」という意味だ。彼女は、どちらに転ぶか読めない激戦州の1つ、ノースカロライナ出身なので、選挙の夜、開票前にクラスに行ったときにも、「私はとてもナーバスだ」と漏らしていた。彼女の恐れていた通り、ノースカロライナはトランプが取った。ヨガの先生たちは、異口同音に、「恐れや不安の気持ちに負けそうになるときこそ、自分の内面に立ち返り、平常心、集中力をとりもどすようにしないといけない」「外のノイズを断り切って、深く呼吸し、ピースを見つけないことが大切です」「普段以上にお互いに親切にしない。自分自身にも優しくなさい」と言った。これもまた、言うまでもなく選挙の話をしている。

「アメリカ人たちは今回の選挙で、自分たちの国と政府を取り戻した」のか？

選挙翌日、トランプ支持者である顧客から我々に送られてきた痛烈な批判のコメントに、「君たちはリベラル偏向すぎる。トランプ当選は絶対はないと言い切っていた君たちには肝心なことが分かってない。オ

バマの8年間の弱腰な外交政策、左寄りの社会政策に比べたら、今後の4年間はアメリカのビジネスにとって良くなるに決まっている。アメリカ人たちは今回の選挙で、自分たちの国と政府を取り戻したのだ」という見解があった。

そのトーンの高さに驚いたが、いい勉強になったし、今さら驚いている我々が求めているのかもしれない。この人物は、日本の某大手銀行のニューヨーク支店に勤める男性で、職業から察するに、恐らく立派に大学を出た、決して貧しくないアメリカ人だ。

「アメリカ人たちは今回の選挙で、自分たちの国と政府を取り戻したのだ」のあたりは、まさにEU離脱支持者と同じ発想だ。我々はこういう人びとの不満を軽く見ていたのだなとつくづく感じている。トランプを支持しているのは郊外や田舎に住む白人で、高卒以下のいわゆる貧困層～中間労働者層だけかと思っていたが、それは大きな間違いできちんと教育を受けて職業も収入もある（むしろ富裕層とも言える）都会の白人男性にも、こういう考え方（「アメリカを再び強くしよう！」「米国第一主義」）の人たちが実はかなりの率でいたのだ。

表立ってはトランプを支持するとは明言せず（そう、馬鹿にされるから）、よって世論調査には反映されることがないわけで、今回の選挙予測が軒並みはずれることになった1つの理由はここにある。こういう「隠れトランプ支持者」たちが今回、選挙ブースで1人きりになった時に、誰にも言わずその不満をぶつけたのだ。

中には、自分の妻子にも自分がトランプを支持していることを打ち明けていないという男性たちもある（「そんなこと言ったら、妻に離婚される」と言って）し、父親が「自分はトランプに入れるつもりだ」と言うのを聞いて、選挙当日まで涙で抗議・懇願したという同性愛者の友達もいる。BREXITの時も、投票日前後に、残留派の議員が殺されたことから、表だって残留を支持しにくい雰囲気になったが、今回の米

国でも似たようなことが起きたということだろう。この構造、ふたを開けたらBREXITとまるっきり同じであった。

彼らは、そもそも自分たちと相容れない価値観を持つ黒人、しかもアイビー・リーグ卒の洗練されたエリートであるオバマが大統領になったことも気に入らなければ、彼の打ち出してきた健康保険などの社会政策、ドット・フランク法をはじめとする金融業界への規制、イランとの合意をはじめとする平和主義的な外交政策にも辟易しており、「ヒラリーになったらまたこの延長だ。それよりは『ビジネスマン』で、マッachoな世界観を持つトランプのほうが良い」と言ってトランプを支持したのだろう。

加えて、ヒラリーが女性であることも気に入らず、クリントン夫妻に対する不信感もあり。こういう血の気の多い白人男性たちが田舎だけではなく都市部にも相当な割合でいたのだ、ということは、ニューヨークに住む私のような人間にとっても少なからずショックなことだった。

バクス・アメリカーナの終焉

それにしても、トランプを支持した人びとは、彼のような排他的で偏見にみちた世界観をもつ、自分が攻撃されると誰彼構わず罵詔雑言を投げつけるような人間を大統領に選ぶことによって、国際社会におけるアメリカという国のブランドや、他国からの尊敬、アメリカがその存在をもって体現してきた理念といったいわゆる「ソフト・パワー」がどれだけ深く傷つくか、ということとは考えないのだろうか。

そして、トランプの、人間同士の憎悪や嫉妬や恐怖心をてこにしたキャンペーンのせいで、ヒラリーやマイノリティーに対する虐め、一定の宗教への偏見、女性蔑視といった、「本来ならアメリカの社会では口にしてはいけないこと」が、「言ってもOKなこと」になってしまい、それが「本音で正直に語ること」と混同されるようになってし



まったことは、今後長きに渡って社会にインパクトを与えるであろう非常に深刻な問題だ。

アメリカは、そもそも世界中から集まってきた移民が作った国であり、これまで長い間、世界一移民に対して開かれた国の1つだったはずだ。これが根本的に変質してしまう可能性がある。既に、この18カ月間にヘイト・クライム（人種的な憎しみを動機とする犯罪や事件）発生率が上昇してきているというデータがあらちで見られる。これは今後もっとひどくなるだろう。子どもを持つ人たち、それも白人ではない親たちは、このことに対して確実に懸念を強めているし、子どもたちも心を痛めている。

そして、私のように移民としてこの国に暮らしている人間としても、トランプの数多くの白人男性至上主義的で女性や移民を蔑視し差別する発言、「アメリカさえ良ければ良い」という世界観を変だとも思わない（あるいは肯定している）人たちが、この国の有権者の半分をも占めるとすると、「アメリカってそんな国だったの？」とがっくりするやら恐ろしくなるやらで、この国に対して描いていたイメージを根本的に覆された、裏切られた気分になってしまう。

でも、これは恐らく、日本でたとえ石原慎太郎元都知事が「ババア」と言ったり、中国人・朝鮮人に対して明らかに偏見に満ちた差別発言を繰り返しても、彼が再起不能なほどは批判されることなくここまで来ているという状態と根本的には同じだ。日本人は、今回のアメリカの様子を見て今は「なんとアホらしい」と嘲笑しているかもしれないが、他人事で済ませないほうがいい。これと同じことが日本でも起こり得る。というか、もう既に起こっているのかもしれない。

私のボスでユーラシア・グループ社長のアイアン・ブレマーがこの数日いろいろなインタビューで繰り返し言っているのは、「民主主義社会、自由世界のリーダーとしてのアメリカの地位、アメリカに対する信頼、こ

の国が体現する自由や平等やオープンさといった理念・価値観への尊敬は、地に落ちた」ということで、彼は、「2016年をもってバックス・アメリカーナ（超大国アメリカの存在により世界平和が維持されている状態）と呼ばれる時代は事実上終了した。教科書には、そう明記されるべきだ」と断言している。ブレマーがこれまで唱えてきた「Gゼロ（リーダーなき世界）」という世界観が、ここへきて本格的に顕在化してしまった。

「Echo Chamber（反響部屋）」の時代の選挙

現在、今回の投票行動の分析がいろいろなスライスの仕方で行われているが、やはりBREXITも今回も、1つのキーワードは「クラス社会」だろう。ここで私が言う「クラス」は、単に収入レベルというだけではなく、教育や価値観や世界観、ライフスタイル、世界との関わり方、男女の役割についての考え方も含めて広い意味での「クラス」であり「階層」である。

それも、世界規模での階層の分裂。これは、一朝一夕ではなく、長い間かけて既に水面下で進んできたものに違いないが、それが本格的に目に見える形で出てきたのが今回の選挙であり、BREXITだったのだろう。フランスもドイツも、来年の選挙、自分たちはどうなるのだろうか？と恐怖を持って見ているだろうし、再来年選挙があるメキシコでも、中道ではなく右と左が強くなるかもしれない。

日本でも選挙以来話題になっているようだが、ドキュメンタリー映画監督のマイケル・ムーアが7月にトランプ当選を予言した「ドナルド・トランプが大統領になる5つの理由を教えよう」は、恐ろしいほど今回の選挙の流れを読んでいた。

私は最初に発表された時に読み、ずーっと頭の隅で覚えていたが、信じたくなかった。開票が進むに従って、彼の不気味な筋

書きが次々現実になっていることに気がついた。選挙翌日、改めて読み返し、その精度の高さに感心し、また納得もした。トランプが共和党の候補になることを真先に予言し、理路整然と説明し、自信を持って断言し、最後まで一貫していたのはアメリカ広しといえども彼と、1980年代から一貫して大統領選の勝者を当ててきたアメリカン大学の歴史学教授アラン・リッチマン教授くらいだ。

マイケル・ムーアは、そもそもが中西部ミシガン州出身だし、いわゆる「ラスト・ベルト（アメリカ中西部と大西洋岸中部地域の一部にわたる、脱工業化が進んでいる領域）」をはじめ、アメリカ中を自分の足で歩き回り、主流から外れた、取り残された人たち、つまり「政治家たちに今までずっと騙されてきた。一生懸命働いてきたけど、自分の人生、いいことなんて全くなかった。自分たちの人生はむしろ悪くなっている」と考える人たちの声を聞きながらこれまで映画を作ってきたから、感覚的に分かったのだろう。

上記の論考の中では、ペンシルバニア、オハイオ、ミシガン、ウィスコンシンといった、「元々は青かったはずの州」が2010年くらいから共和党の州知事を選んでいることに注目し、「ラスト・ベルト」が赤くシフトすることを正確に予言している。そして、それが今回起こった。

ソーシャル・メディアが発達した世界では、人間は自分と同一ような価値観、教育レベル、収入レベルの人たちとしか付き合わず、常に似たもの同士で意見を交わし、「みんなが自分と同じように感じている」と（誤解して）感じがちである。

特にアメリカのようにあからさまに階層化した社会においては、自分が属する世界の外にいる人たちは、受けてきた教育も、住んでいる場所も、買い物にいくスーパーマーケットも、食べている物も、見るテレビのチャンネルもウェブサイトも違う。自分と違う世界観の人たちと全くなかかわらずに

日々を生きていくことが容易に可能だ。

ひと昔前、アメリカ国民が皆で同じ4大ネットワーク・チャンネルを見、同じような新聞を読み、それを情報ソースにしていたのに比べると、それはまったく違う社会構造であり、分断されそれぞれに閉ざされた世界が1つの社会に同居しているという状態になっている。これと同じことが、多分世界中で今起きている。ニューヨークでも、パリでも、ロンドンでも、上海でも、デリーでも、東京でも。

自分と同じような価値観の人とばかり意見を交わす状態を、英語では「Echo Chamber Effect（反響部屋現象）」という。つまり壁から反響してくる自分自身の声を繰り返し聞いている（そうとは自覚せずに）……という状態である。そのことを私も以前から頭では理解してはいたが、今回のことで自分がいかに会社や友達など、似通った限られた層（おそらく社会の上層部数パーセント）の人たちの中でしか生きていないか、つくづく思い知らされた。

選挙の直前、コネチカット郊外を車で走っていて初めて、「それなりに裕福なエリアでも意外とトランプの看板があるんだな」と思ったのを覚えている。大都市にいて、コスモポリタンでオープン・マインドな「エリート」ばかりと話していると、みんなが自分と同じような世界観を持っているという錯覚を起こす。1つの例として、私のフェイスブックの友達には、誰1人としてトランプ支持者はいない。会社の同僚にもいない（少なくとも表立っては）。だからこそ、我々にはトランプ勝利が読めなかったのだ。「リベラル・バブル」と言われても仕方ない。

私のボスが時々日本のメディアやお客様と話している時、「私は、自分の国の一定の層（自分の生まれた州から一歩も出たことのないような、パスポートも持っていないような層）のアメリカ人よりも、日本人であるあなたたちの方がずっと多くの共通点がある」という言い方をする。その極端な例がダボス会議であり、マンハッタンであり、ワ

